11年ぶりの初恋
体験版（第1話～第3話）

※本作品は18歳未満の方の閲覧を禁止します

第1話「11年ぶりの、さやか姉ちゃん」

平日の朝。満員電車は、今日も息苦しかった。

この街に引っ越してきて三日目。僕――涼太は、少しでも小さく見えるように肩をすぼめ、吊り革を掴んでいた。無理な話だった。周りの人より頭一つ大きくて、腕も胸も、スーツを着ても隠しようがない。

就職先がこの街の支社に決まったとき、最初に思い浮かんだのはさやか姉ちゃんだった。

結婚して、この辺りに住んでいる――それだけは、地元にいた頃に母から聞いていた。でも住所も連絡先も知らない。11年も会っていない相手が、自分のことなんて覚えているかどうかも分からなかった。

電車が大きく揺れた。

「……っ」

少し先で、小柄な女性が壁際に追い詰められていた。顔色が悪い。何か言おうとしているのに、声が出ないように唇だけが震えている。

その背後に立つ男の手が、鞄の影で不自然に動くたび、女性の肩がびくりと震えた。

僕は吊り革を離した。

「すみません、通してください」

「あ、はい……」

「ごめんなさい、少しだけ失礼します」

人混みを分けて進む。男の手がもう一度伸びかけた瞬間、その手首を掴んだ。

「何してるんですか」

車内がざわつく。

「な、何だよ！　離せよ！」

「離しません。見てました」

「人違いだろ！　揺れて当たっただけだ！」

「当たっただけの相手が、あんなに震えますか」

怒鳴らなかった。声も荒げなかった。でも僕の顔と体が怖かったんだろう。男の顔から、みるみる血の気が引いていった。

「次の駅で降りてください。駅員さんに一緒に来てもらいます」

「なんで僕が……！」

「違うなら、そこで説明してください」

そこで初めて、女性がゆっくり顔を上げた。

目が合った。

――嘘だろ。

小柄で、昔とほとんど変わらない顔。泣いたら抱き上げてくれて、転んだら膝に絆創膏を貼ってくれて、手を引いて散歩に連れていってくれた人。

僕の初恋の人だった。

口から先に、出ていた。

「さやか姉ちゃん……？」

女性の目が、驚いたように揺れた。

「え……？」

「あっ、いえ……すみません、今は次の駅で――大丈夫です、僕は触りません。駅員さんのところまで、一緒に行きましょう」

自分でも驚くほど、声が震えていた。

次の駅で男を駅員に引き渡し、駅事務所で事情を説明した。男は最後まで言い訳をしていたけれど、他にも見ていた乗客がいて、駅員が警察へ連絡することになった。

手続きが終わるまで、さやか姉ちゃんは一度も僕の顔をまっすぐ見なかった。小さな声で「ありがとうございます」と繰り返して、水をもらった手がずっと震えていた。

でも、ホームのベンチに座ったとき、ようやく彼女が顔を上げた。

「……さっき、私のこと、なんて呼んだ？」

「え」

「さやか姉ちゃん、って言わなかった？」

僕は慌てた。

「す、すみません。つい……もう大人なのに、昔のまま」

「涼ちゃん？」

その呼び方に、今度は僕が息を止めた。

「本当に……涼ちゃんなの？」

「はい。地元の、お隣の涼太です」

「嘘……」

さやか姉ちゃんは、僕の顔をじっと見た。それから視線を、広い肩、太い腕、大きな手へとゆっくり移した。

「だって、涼ちゃんは……私が地元を出たとき、まだ11歳で。私の腰くらいまでしかなくて、いつも後ろをついてきて……」

「11年経ちました。僕、22です」

「にじゅうに……」

信じられない、という顔のまま、彼女の目から涙が溢れた。

「ごめん、ごめんね。助けてもらったのに、こんな……」

「無理しないでください。怖かったんですから」

「ううん、それだけじゃないの」

ハンカチで目を押さえながら、彼女は小さく笑った。

「だって、オムツを替えてた子が……こんなに大きくなって、私を助けてくれるなんて、頭が追いつかなくて」

「姉ちゃん、その話は今しなくていいです……」

「ふふ。涼ちゃんは、すぐ耳が赤くなるところは昔と一緒だね」

「姉ちゃん、涼ちゃんは……」

言いかけて、やめた。昔からずっと、姉ちゃんは僕をそう呼んでいた。今さら「くん」なんてよそよそしい呼び方をされる方が、ずっと嫌だった。

彼女は僕の顎の小さな傷をじっと見た。

「それ、三輪車で転んだときの傷だよね。私が絆創膏、貼ってあげた」

「……よく覚えてますね」

「覚えてるよ。涼ちゃんは泣き虫で、でも『男の子だから泣かない』って、涙を袖でぐいぐい拭いてた」

「姉ちゃん……」

「ごめんって。でも本当に、涼ちゃんだ……」

彼女は、確かめるみたいに僕の腕にそっと触れた。すぐに離れたけれど、その手は震えていた。

「こんなに太くなっちゃって。私の手なんか、片手に入っちゃうね」

「姉ちゃんは、昔と全然変わらないです」

「そんなことないよ。私もう41だよ」

「見えません」

「お世辞、上手になったね」

「本当です」

二人とも、会社に遅れる連絡は入れてあった。このまま別れるのが惜しくて、駅前の喫茶店で少しだけ座ることにした。行く途中、足元がふらついたさやか姉ちゃんが、無意識に僕のシャツの袖を掴んだ。

昔は逆だった。僕が姉ちゃんのスカートの裾を掴んで、離れようとしなかった。

コーヒーを前にして、彼女がぽつりと聞いた。

「涼ちゃんは、どうしてこっちに？」

「就職で支社が決まって。三日前、駅の近くのアパートに引っ越してきました」

「そうなの？　じゃあ、私と最寄り駅が一緒だね」

「姉ちゃんがこの辺に住んでるのは聞いてました。でも、まさか会えるとは思ってなくて」

「私もよ。……ごめんね、私、地元に全然帰れてなくて。結婚してから忙しくて、それから旦那さんが病気になって」

彼女の指が、カップの縁をなぞった。

「3年前に、亡くなったの」

僕は言葉を失った。

「……お母さんから、もしかしたらって聞いたことはありました。でも、僕から聞いていいことじゃないと思って」

「うん。ありがとう。もう大丈夫なの。今日みたいに仕事にも行っ

てるし、ちゃんと笑えるし。でも、あの頃の人と会うと、やっぱり少し戻っちゃうね」

「姉ちゃんは、ずっと一人で頑張ってたんですね」

「涼ちゃんまで、そんな顔しないで」

彼女は笑って、僕の頭を撫でようと手を伸ばした。でも届かなくて、二人で顔を見合わせた。

昔は簡単に届いた手が、今は僕が少し体をかがめないと届かない。

僕が遠慮がちに頭を下げると、彼女は懐かしそうに髪をくしゃりと撫でた。

「本当に大きくなったねえ」

「……姉ちゃん、子ども扱いです」

「だって、涼ちゃんが5歳のとき言ってたの、覚えてる？
『僕が大きくなったら、さやか姉ちゃんを守る』って」

僕の顔が一気に熱くなった。

「そんな昔のことまで覚えてなくていいです……！」

「今日、本当に守ってくれたね」

彼女の目が、また潤んだ。

「ありがとう、涼ちゃん。情けない姉ちゃんでごめんね」

「情けなくないです」

僕は、はっきり言った。

「声が出なかったのは、怖かったからです。姉ちゃんは何も悪くない。悪いのは、あの男だけです」

さやか姉ちゃんは少し驚いて、それからコーヒーの向こうで、安心したように息を吐いた。

喫茶店を出る時間になっても、どちらもなかなか席を立たなかった

。

「あのね、涼ちゃん」

改札の前で、彼女はスマホを取り出した。

「連絡先、教えて。お礼がしたいのもあるけど……それだけじゃなくて、また地元の話もしたい。もう、ここで途切れさせたくないな」

「僕もです」

「それとね、涼ちゃんに会えたのも嬉しいけど、『さやか姉ちゃん』って呼ばれるのも嬉しいの。知らない人に助けられたと思ってたのに、その一言で一気に昔に戻ったみたいだった」

「……姉ちゃんって呼んだら、姉ちゃんは僕をずっと子どもだって思います」

「思わないよ」

彼女は僕の袖を、ほんの少しだけ引いた。

「今日の涼ちゃんは、ちゃんと大人の男の人だったよ」

心臓が、跳ねた。

電車の音に紛れて、彼女は笑った。

「じゃあね、涼ちゃん。またね」

「はい。また……さやか姉ちゃん」

歩いていく小さな背中を見送って、僕は登録したばかりの名前を何度も見返した。

11年ぶりの再会は、決してあっさりしたものじゃなかった。

（第1話　完）

第2話「さやかの今」

会社に着いた私――さやかは、いつものように笑って席に座った。

「おはようございます。遅くなってすみません」

「さやかさん、おはようございます」

書類を持ってきたのは、部下の亜美ちゃんだった。身長165センチ、すらりと背が高くて、短い髪がよく似合うボーイッシュな美人。女性から見ても格好いいのに、本人はそういう評判を少し照れくさそうにする。

亜美ちゃんは、私の顔を見てすぐに眉を寄せた。

「顔色、悪いですよ」

「そう？
大丈夫、大丈夫。ちょっと電車でトラブルがあって遅れただけ」

「トラブルって……」

「あとで話すね。今は仕事しなきゃ」

そう言ってパソコンを開いたのに、パスワードを二回間違えた。指が震えて、キーボードの上で何度も止まる。

満員電車の揺れ。背後の気配。助けてと言おうとしても出なかった声。

――41にもなって、なんで声も出せなかったんだろう。

悔しくて、怖くて、情けなかった。

お昼休み、給湯室でお茶を入れていると、亜美ちゃんが入ってきた。ドアを閉めて、小さな声で聞く。

「さやかさん、やっぱり何かありましたよね。手、まだ震えてます」

私は、カップを持ったまま黙った。亜美ちゃんの前では、強い先輩でいようとしても、だいたい隠しきれない。

「……今朝、痴漢に遭ったの」

亜美ちゃんの表情が変わった。

「え……」

「満員電車で、声が出なくて。怖くて固まってたら、男の人が助けてくれたの。その人の手首を掴んで、次の駅で駅員さんに引き渡してくれて」

「そいつ、最低ですね」

亜美ちゃんの声は静かだったけど、はっきり怒っていた。

「大丈夫なんですか、本当に。病院とか、警察とか……」

「駅で話は聞いてもらったよ。体は大丈夫。ただ、思い出すと手が震えるだけ」

「当たり前ですよ。無理しないで、今日は早く帰りましょう。仕事は私がやります」

「亜美ちゃんにばかり悪いよ」

「こういうときくらい、頼ってください」

亜美ちゃんは、私のカップを取り上げて、新しいお茶を入れてくれた。

この子には、ずっとこんなふうに支えられてきた。

夫を亡くして半年ほど経った頃、私は仕事中は笑っていても、家に帰ると何もできなかった。ご飯も食べられなくて、夜も眠れなくて、夫の写真の前で泣いてばかりいた。

ある夜、残業していた私が会議室で泣いているのを、亜美ちゃんが見つけた。

最初はお茶を置いてくれただけだった。次は、帰りが遅い私を駅まで送ってくれた。そのうち、私の家でご飯を作ってくれるようになって、泣く私を何も言わず抱きしめてくれるようになった。

元々、私は女性に興味なんてなかった。好きになった人も、初めての人も、そのあと体を重ねた人も、夫だけだった。

だから、自分でも驚いた。

亜美ちゃんに抱きしめられ、髪を撫でられ、キスをされたとき、私は拒めなかった。女の人同士なんて、という戸惑いより、誰かに抱かれて泣けることが、そのときの私には必要だった。

女の人との関係では、私はいつも受け身だった。亜美ちゃんが先に触れて、亜美ちゃんに委ねて、私はその腕の中で小さくなっているだけ。それが、私にとっての亜美ちゃんとの形になった。

恋人、と呼べるのかは分からない。会社では先輩と部下のままだし、夫の写真に手を合わせる私を、亜美ちゃんは無理に変えようとしない。

私も、亜美ちゃんに「ずっと一緒にいて」とは言えていない。

給湯室で、亜美ちゃんが聞いた。

「助けてくれた人には、お礼言えたんですか？」

「うん。しかもね、その人……涼ちゃんだったの」

「涼ちゃん？」

「地元のお隣さん。私、赤ちゃんの頃から知ってるの。オムツを替えたこともあって、手を引いて散歩もよく行ったの。私が結婚でこっちに来たとき、まだ11歳だったのに、今日会ったら22歳で、すごく大きな男の人になってた」

言っているうちに、自分の声が少し柔らかくなっているのに気づいた。

亜美ちゃんが、じっと私を見た。

「さやかさん」

「なに？」

「怖いことがあった日なのに、涼ちゃんの話をするとき、ちょっとほっとしてますね」

「そんなことないよ。懐かしいだけ」

「懐かしい、だけですか」

「だけだよ。涼ちゃんは弟みたいなものだもん」

そう言ったのに、駅で言われた言葉が耳に残っていた。

――もう、子どもじゃないですよ。

大きな手で痴漢の男の手首を掴みながら、私には触れないように距離を取ってくれた涼ちゃん。怖い顔で男を黙らせたのに、私の前では昔みたいに耳を赤くした涼ちゃん。

弟みたいなもの、のはずなのに、思い出す胸の奥が少し熱かった。

夕方、亜美ちゃんが帰りも一緒についてきてくれた。

電車のドアが開いた瞬間、私の体が固まった。朝ほど混んでいないのに、人の波が怖い。亜美ちゃんは黙って私の前に立ち、他の人と私の間に自分の体を入れてくれた。

「さやかさん、こっちにいてください」

「ありがとう、亜美ちゃん」

「今日は私が泊まります。さやかさんを一人にしません」

家に着いて、私はいつものように写真に声をかけた。

「ただいま。今日はね……」

朝の出来事も、涼ちゃんと再会したことも、全部話した。亜美ちゃんはキッチンでお茶を用意しながら、その間は静かに待っていてく

れる。夫の話をする私に、亜美ちゃんが嫉妬したり、止めたりしたことは一度もない。

リビングで二人分のご飯を食べたあと、急に涙が出た。仕事中ずっと我慢していたものが、全部溢れたみたいだった。

「亜美ちゃん……私、怖かった。声も出せなくて、誰にも気づいてもらえなかったらどうしようって」

「もう大丈夫ですよ。ここにいますから」

亜美ちゃんに抱き寄せられて、私はその胸に顔を埋めた。背中をゆっくり撫でられると、震えが少しずつ収まっていった。

「亜美ちゃんって、どうしてこんなに優しいの」

「さやかさんが、一人で泣きすぎるからです」

「私、女の人に興味なんてなかったのにね。亜美ちゃんの前だと、どうしても甘えちゃう」

「甘えていいんですよ。私の前では、頑張らなくていいんです」

その腕の中で、私は小さく頷いた。

なのに、頭の片隅では、別の大きな手のことを考えていた。

痴漢の男を掴んだ涼ちゃんの手。私に触れないように、慎重に距離を取ってくれた手。

――姉ちゃんは何も悪くない。悪いのは、あの男だけです。

その言葉に、どれだけ救われたか、涼ちゃんは知らないだろう。

夜、亜美ちゃんが隣で眠ってから、スマホが小さく震えた。

『さやか姉ちゃん、家に着きましたか。今日は本当に、お疲れさまでした。ゆっくり休んでください』

涼ちゃんからのメッセージだった。

私は、眠っている亜美ちゃんの寝顔と、スマホの画面を、交互に見

た。

『ありがとう、涼ちゃん。同僚が心配して泊まってくれているから、大丈夫だよ』

すぐに返事が来た。

『よかったです。安心しました』

たったそれだけの言葉なのに、私はスマホを胸に当ててしまった。

夫を亡くして、亜美ちゃんに慰められて、それでようやく形になっていた私の日常に、今朝、涼ちゃんが帰ってきた。

懐かしいだけ、弟みたいなもの。

そう思おうとしたのに、心臓は少しだけ、違う答えを出していた。

（第2話　完）

第3話「亜美と、越えてしまった夜」―回想編―

亜美ちゃんと初めて会ったのは、5年前の春だった。

私の部署に配属された亜美ちゃんは、背が高くて、短い髪が似合う、ボーイッシュな美人だった。初日から女子社員がざわつくくらい格好いいのに、本人は緊張して、書類を二枚落とした。

「ご、ごめんなさい！」

「亜美ちゃん、謝る前に拾って。順番も直して」

「は、はい！」

「数字の列、ここもずれてる。仕事は優しくしても直らないよ。最初に確認する癖をつけて」

「申し訳ありません……」

しょんぼりする亜美ちゃんに、私は小さな飴を一つ渡した。

「でも、初日は誰でもそんなもの。分からないことは、私がいるうちに聞いて」

「……さやかさんって、厳しいけど優しいんですね」

「当たり前でしょ。亜美ちゃんの上司だもん」

その頃、私は結婚していた。左手の指輪を見て、亜美ちゃんが言った。

「さやかさん、ご結婚されてるんですか」

「うん。旦那がね、今日もお弁当作ってくれたの」

「仲いいんですね」

「うん、仲いいよ」

あの頃は、本当に幸せだった。亜美ちゃんは、その幸せな頃の私も知っている、数少ない人になった。

夫が病気になったのは、それから少ししてからだった。

病院からの電話に、私は会議中でも顔色を変えるようになった。亜美ちゃんは何も聞かず、私の資料を先に用意してくれた。

「さやかさん、午後の会議は私が出ます」

「悪いよ、亜美ちゃんの仕事じゃないのに」

「先輩の仕事は、部下の仕事でもあります」

「ありがとう……」

「礼はいいです。その代わり、ちゃんと病院に行ってください」

夫が亡くなった日のことも、亜美ちゃんは見ていた。葬儀で、私は泣かなかった。参列者に頭を下げて、受付を確認して、笑顔まで作った。

帰り際、亜美ちゃんだけが言った。

「さやかさん、車まで送ります」

「大丈夫よ」

「大丈夫じゃない顔で、大丈夫って言わないでください」

車に乗った途端、私は声を上げて泣いた。亜美ちゃんはエンジンもかけず、ずっと隣にいてくれた。

それから一年。私は仕事に戻り、以前より厳しくなったと思う。自分にも、部下にも。特に亜美ちゃんには、甘えたくない気持ちがあって、強く当たった。

「亜美ちゃん、こんなミス、次は許さないよ」

「申し訳ありません、直します」

「口だけじゃなくて、手を動かして」

「はい」

亜美ちゃんは変わらなかった。叱られても腐らず、私が残業すればお茶を置き、駅まで何気なく一緒に歩いた。

夫の一周忌の日も、亜美ちゃんだけが気づいていた。

「さやかさん」

「なに？」

「今日は、早く帰りましょう。私が送ります」

「なんで？」

「……今日でしょう。一周忌」

私は笑おうとして、失敗した。

家まで送ってくれた亜美ちゃんは、夫の写真に静かに手を合わせた。

「お久しぶりです。さやかさん、今日も頑張ってましたよ」

その一言で、涙が止まらなくなった。

「亜美ちゃん、私、もう一年も一人なの。仕事では平気な顔してるけど、家に帰ると誰もいなくて、触ってくれる人もいなくて……あの人のこと忘れたいわけじゃないの。ただ、寂しいの」

亜美ちゃんが、私を抱きしめた。

「分かってます」

「亜美ちゃんは優しいね。亜美ちゃんがいてくれて、本当に助かってる」

「さやかさん」

亜美ちゃんの声が、低くなった。

「私、ずっと黙ってました。配属された日から、さやかさんが好きだったんです」

「え……」

「結婚してるのも知ってました。旦那さんが亡くなってからも、弱ってるときに言うことじゃないと思って黙ってました。でも――」

次の瞬間、亜美ちゃんの唇が私の唇に触れた。

驚いて、背中がソファに倒れる。

「亜美ちゃん、ダメ……！」

私は亜美ちゃんの肩を強く押し返した。

「私は亜美ちゃんの上司なのよ？
今日はあの人の命日なの。女同士で、こんなこと……やめなさい」

亜美ちゃんは、すぐに体を離した。

「……すみません」

立ち上がって、帰ろうとする亜美ちゃんの背中を見たとき、私は自分が無意識に亜美ちゃんのシャツを掴んでいたことに気づいた。

はっとして、私はその手を離した。指を開いて、膝の上に落とした。

掴み直しもしなかった。キスもしなかった。

「帰ります。忘れてください」

「亜美ちゃん」

出てきたのは、情けないほど小さな声だった。

「……行かないで。一人にしないで」

亜美ちゃんが振り返った。

「さやかさん、それはどういう意味か分かってますか」

「分からない……分からないけど、一人は嫌なの」

「止めてほしいですか」

私は涙のまま、ゆっくり首を横に振った。

それだけだった。私は何もしていない。亜美ちゃんが戻ってきて、亜美ちゃんが顔を近づけて、亜美ちゃんがキスをした。

私は目を閉じて、受け止めるだけだった。唇が震えて、亜美ちゃんの唇に押されるように少し開いたけれど、自分から求めたわけじゃない。全部、亜美ちゃんがした。

ベッドに移っても、私は何もしていない。亜美ちゃんが私のブラウスのボタンを一つずつ外し、亜美ちゃんが脱がせ、亜美ちゃんが触れた。

「仕事中はあんなに厳しいのに、今は声も出せないんですね」

「そんなこと、言わないで……」

「自分からは言えない人なんですね。いいですよ、今夜は全部私がします。さやかさんは、感じるだけでいい」

亜美ちゃんの唇が首筋を辿り、胸を優しく揉んで、固くなった先端を舌で転がした。夫とは違う、女性の柔らかい体と、女性だから分かる触り方だった。焦らして、止めて、また触れる。その全部を亜美ちゃんが決めた。

私はシーツを掴むしかできなかった。

「あっ……亜美ちゃん……」

「誰に触られてるんですか」

「亜美ちゃんに……」

「気持ちいいですか」

答えなければ、亜美ちゃんの指は濡れた下着の上を撫でるだけで、止まってしまう。私は泣きそうな声で、言わされた。

「……気持ちいい」

「よく言えました」

下着の中で亜美ちゃんの長い指が私を撫で、探り、一番感じる場所を正確に擦った。もう一方の指がゆっくり入ってくると、私の手はシーツを強く握った。

「あっ……あ、亜美ちゃん、そこ……」

「声、出していいですよ。ここでは上司じゃないんですから」

亜美ちゃんは私の反応を見ながら指の動きを変え、言葉で追い詰め、逃げ場をなくした。優しいだけじゃない。Sで、意地悪で、どうすれば私が乱れるか、全部分かっているみたいだった。

「さやかさん、今、誰のことを考えてますか」

「亜美ちゃんのこと……亜美ちゃんしか、考えられない……！」

「じゃあ、もう少し私に委ねてください」

体が大きく震えて、私は亜美ちゃんに抱かれたまま達していた。自分は何もしていない。キスも、触れることも、全部亜美ちゃんにされて、初めて女性にこんなふうに――罪悪感があるのに、体は正直に喜んでいた。

終わったあとも、亜美ちゃんは私を抱いたまま離さなかった。

「ごめんね、亜美ちゃん。私、旦那さんの命日に……」

「謝らなくていいです。旦那さんの場所は、旦那さんのものです。私は、今のさやかさんを抱いただけです」

「私、女の人には興味なかったのに」

「私にも、まだ分からなくていいですよ」

その夜、私は一年ぶりに、朝まで一度も目を覚まさず眠った。

翌日、会社で私は亜美ちゃんに、以前より厳しく当たった。

「亜美ちゃん、この資料、昨日の今日で何？」

「申し訳ありません。直します」

「言い訳しない」

「はい」

亜美ちゃんは変わらなかった。私的なことは一言も口にせず、叱られれば直し、忙しければお茶を置いた。私だけが、あの夜を意識していた。

会議室へ歩く亜美ちゃんのヒップのライン。私の机に身を乗り出したときの、シャツの胸の膨らみ。近くで報告するときの唇。資料をめくる、長い指先。

指を見るたび、あの夜を思い出した。

「亜美ちゃん、ペン」

「はい」

渡されたペンに、指先が触れる。私は反射的に手を引いて、ペンを落とした。

「さやかさん？」

「な、なんでもない。仕事に戻って」

家に帰ると、もっとひどかった。シャワーを浴びてベッドに入っても、亜美ちゃんの言葉が耳に残る。

――今夜は全部私がします。さやかさんは、感じるだけでいい。

私は自分の指を、あの夜に亜美ちゃんの指が触れた場所へ伸ばした。真似をしても、同じにはならなかった。それでも亜美ちゃんの顔と声を思い出すだけで体が熱くなって、小さく名前を呼んで、達してしまった。

「ごめんなさい……」

夫の写真に謝って、翌日また会社で亜美ちゃんの指先に反応する。

その繰り返しが、2週間続いた。

亜美ちゃんは一度も迫ってこなかった。変わらない態度で、変わらない距離を保った。変わってしまったのは、私だけだった。

2週間後の残業の夜、フロアには二人だけが残っていた。

亜美ちゃんはいつものようにお茶を置いて、鞄を持った。

「お先に失礼します、さやかさん」

「あ、亜美ちゃん、これだけ確認して」

渡した資料に、二人の指が触れた。

私は、その手を離せなかった。亜美ちゃんの手首を、気づけば掴んでいた。

「さやかさん……？」

沈黙が長く続いた。亜美ちゃんは無理に振りほどかず、待ってくれていた。

「亜美ちゃん」

仕事場で使う、厳しい上司の声にしようとした。でも出てきた声は、震えていた。

「今日……私の家に来て」

「それは、命令ですか」

「命令じゃなくて……お願い」

亜美ちゃんが、初めて小さく笑った。

「今夜も、私が主導していいんですか」

私は耳まで赤くして、頷いた。

「……亜美ちゃんに、好きにしてほしい」

（第3話　完）